

疾走する精神の先達

——高野繁男先生のご退任に添えて

日 高 昭 一

高野繁男先生は、昭和五十一年に神奈川大学に着任され、平成十七年三月、停年でご退任になられるまで、学生の教育・指導に情熱を注がれるとともに、ご専門の日本語学を軸に歴史・思想などの学問ジャンルと広く切り結ぶべく、人文学研究所の共同研究「西洋文化の受容」を立ち上げられ、その中心的な存在として大きな力を振るわれてこられました。そういう先生に、およそ二十年ちかく、親しく接してきた私にとっても、このたびのご退任は感慨ひとしおのがあります。

研究領域としては、いわゆる日本語・日本文学の範疇にあるとはいえ、高野先生の日本語学に関するお仕事の内容について、私には語る資格もありません。それについては、さいわいなことに、先生が近年ご刊行になった『近代漢語の研究』についての書評が、その一端なりを伝えてくれることだろうと思います。

ところで先生は、教育・研究の間に、基本科目協議会の会長をはじめとして、人文学研究所長、国際交流センター長、教学評議員など、さまざまな役職をつとめられてきました。そしてそのいずれの役にあっても、高い能力を発揮されたことは、あらためていうまでもありません。

協議会では、大学大衆化時代を先取りするがごとく、少人数履修による基礎ゼミナールを開講したり、多人数履修を制限するなどの改革を打ち出されて、基本科目の制度的な基礎をつくられました。また研究所長としては、杭州大学（現・浙江大学）との学術協定をはじめとして、人文学の分野における国際交流の道筋を明確につけられました。さらに、忘れてならないのは、日本語教員養成課程の設置にあたって發揮された先生の高い識見です。この課程は、文部省（当時）の要請によって本学にも開かれることになったのですが、その折り先生がつけられたカリキュラムの内容が、文部省の担当者から高く評価され、他大学からの視察者が相次いで訪れることにもなったのです。

そういう先生に、より近くで接することになったのは、私が本学に赴任してすぐの頃で、研究所長であった先生のもとで常任委員を仰せつかったときでした。そのとき、同時に常任委員を務められたのは中国学科の鈴木陽一さんですが、思えば先生は若いわれわれが委員としての仕事を自由にかつ大胆にできるように、たえず気配りをされていたように思います。その過程で杭州大学との学術交流が本格的に推進されることになったのですが、そのことはまた、やがて先生ご自身が在外研究で杭州大学に赴かれるという契機にもなったようです。そうして、杭州大学に滞在されていた先生を、ある秋の数日間、中島三千男さんとともに訪れるという機会に恵まれた私たちが、あの美しい西湖のほとりで心ゆくまで歓談したことは、なつかしい思い出のひとつになっています。

こうして先生は、大学の現代的なありようを鋭く鳥瞰しつつ、われわれ若輩の者たちをさまざまな点でリードしてこられました。その行動や思考はじつに軽やかで、また柔軟でしたが、そうした先生の原動力となっていたのは、或いは、知る人ぞ知るマラソン・ランナーの経験から得られたものなのかもしれません。各地の大会に参加しては、

年齢別のタイムを大幅に越えてつねに完走されたというその疾走力が、先生のキャンパス・ライフを支えていたとみることもできましょう。研究室からウォーキング・シューズで軽やかに講義に向かわれる先生の姿が、今でもあざやかに眼に浮かびます。

この五月、頂戴したご退任の挨拶状によれば、先生はこの秋にも浙江大学に赴かれ、大学院生・学部生の指導に当たられるとのことでした。先生のご滞在が、前にも増して快適であり、また、さらなるご活躍の場となりますことを、心からお祈りする次第です。